

## 妊娠に関連するワクチンについて

昨年8月の英国ヘルスケア通信で、妊娠中のコロナウイルスワクチン接種の必要性をお知らせいたしました。

[http://www.nipponclub.co.uk/information/healthcare\\_pdf/healthcare2108.pdf](http://www.nipponclub.co.uk/information/healthcare_pdf/healthcare2108.pdf)

今回は、コロナウイルスワクチン以外で、妊娠に関連する重要なワクチンについて述べたいと思います。

### ◆ 妊娠前の風疹ワクチン

妊娠中に風疹(Rubella)にかかると、赤ちゃんの奇形につながることもあり注意が必要です。

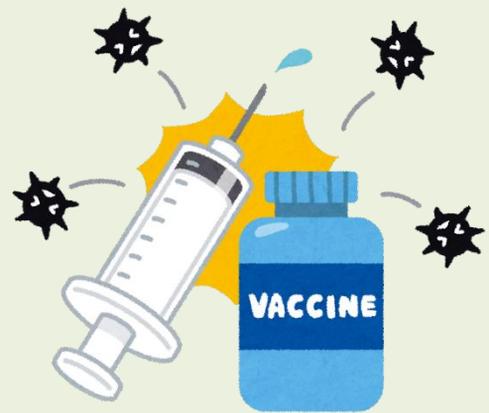
そのため、妊娠を考える前に、過去に風疹ワクチンを2回接種しているか確認しておくとい良いでしょう。具体的には、ご自身の「ワクチン接種の記録」をみていただきます。風疹ワクチンを2回接種されていれば、風疹にかかる心配は、ほぼないと考えてよいでしょう。

もし、情報が不明の場合には、血液検査で確認することが可能です。抗体が陽性の場合には、過去に風疹ワクチンを接種したか感染したかのどちらかと判断され、この場合は、風疹にかかる心配はありません。よって、新たな風疹ワクチンを接種する必要はなく、妊娠を考えることができます。抗体が陰性の場合には、過去に風疹ワクチンを接種しておらず、また、風疹にかかったこともないと判断されます。この場合、風疹にかかる心配がありますので、妊娠を考える前に、風疹ワクチンを2回接種することが勧められています。

また、血液検査を行わず、風疹ワクチンを接種することも可能です。過去に風疹ワクチンを接種している場合には、追加免疫と称し、より高い予防効果が期待できます。

風疹ワクチンは、大変安全なワクチンで、妊娠中に風疹ワクチンを接種されたため胎児に障害がでたという報告は世界的にもありません。しかしながら、その可能性は理論的にゼロではありません。そのため、ワクチン接種後、イギリス式では、1ヶ月、日本式では、2ヶ月の避妊が必要とされています。

もう既に妊娠している場合には、その妊娠中、風疹ワクチンを接種することはできません。この場合には、産後に風疹ワクチンを接種することになります。



### ◆ 妊娠中の百日咳ワクチン

百日咳(Whooping Cough, Pertussis)は、細菌によって引き起こされる感染性の強い病気です。咳が長く続くことにより、息苦しくなったりします。発熱、鼻水、激しい咳の後に嘔吐するなどの症状がみられることもあります。赤ちゃんの百日咳が悪化すると、肺炎による呼吸困難から脳に後遺症をおこすこともあります。

10年ほど前に、百日咳による乳児の死亡がイギリスで急激に増えていると、イギリスの保健機関から報告がありました。そこで、百日咳ワクチン未接種の生後2ヶ月までの赤ちゃんを感染から守るため、妊婦さんにワクチン接種することが推奨されることになりました。

ワクチン接種は、妊娠16-32週までの期間にお受けいただけます。ワクチンを接種した後に、お母さんの体内で百日咳菌に対する抗体（免疫物質）ができ、それが胎盤を通して胎児に送られることにより赤ちゃんを感染から守ります。

なお、日本国内では、百日咳の流行を認めないため、本ワクチンを妊婦さんに接種する方策は取られておりません。

## ◆ 妊娠中のインフルエンザワクチン

妊娠中、インフルエンザ(Flu)にかかると、妊娠していない時に比べて、重症化しやすいと言われています。また、流産、死産につながることもあります。

そのため、妊婦さんは、インフルエンザのハイリスク群とされており、英国、日本ともに、インフルエンザワクチン接種が推奨されています。

妊娠中および授乳中のインフルエンザワクチンで、胎児や乳児への悪影響はありませんのでご安心ください。

なお、前シーズン、インフルエンザワクチンをお受けになっている場合でも、新たに接種することが推奨されています。

また、妊娠中の接種がすすめられている百日咳ワクチンとの同時接種も可能です。

コロナウイルスワクチンを初めて接種する場合は、念のため1週間あけて、同時接種を避けるのが望ましいようです。2回目以降のブースターの場合には、同時接種可能とされています。



来シーズンも、インフルエンザが流行する前に、ご家族の皆様も含めてワクチンをお受けいただくとよいでしょう。

以上、ご参考になれば幸いです。

ジャパングリーンメディカルセンター  
倉田 仁 （くらた ひとし）